

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。 解答番号は〔二〕の 1 から 13 までとする。

認識をめぐる現代人の直観には、二つの極があるように思われる。そのことを象徴する言葉を二つ取り上げてみたい。一つは、二〇世紀を代表する哲学者ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインによる次の観察である。

われわれは、科学的な証拠に反するようなことを信じる人を、分別ある人とは呼ばない。

例えば、祈祷によって病気を治そうとする人を見たら、多くの人は「おかしい」と思うだろう。そう言いたくなるのは、私たちが「科学的証拠」を信頼しているからだ。

人間は観察や実験によって様々な事実を明らかにしてきた。もちろん、中には主観的なバイアスによる間違いもあるが、それを補って余りある膨大な知識を蓄積している。だから、バイアスさえ取り除けば、私たちは世界のことを正しく知ることができるし、逆に、観察や実験によって得られた「科学的証拠」を否定する人がいるとすれば、その人の方こそどこかおかしいに違いない——<sup>①</sup>そう考えられる。ここには、「世界は一つであり、客観的な方法を用いれば、世界についての事実を明らかにできる」という一種の実証主義がある。

しかし、これとは異なるもう一つの発想もある。少し時代は遡るが、一七世紀フランスの哲学者ブレース・パスカルは次のように述べている。

ピレネー山脈のこちら側では真実でも、向こう側では誤りなのだ。

ピレネー山脈とは、フランスとスペインの国境に沿って連なる山脈のことである。だから、パスカルはここで、

と言っているのだ。

これは、現代人にとっても身近な発想だろう。ものの見方や感じ方は人それぞれ違うし、時代や地域によってもバラバラだ。一つの出来事についても様々な解釈がありうるし、自分の社会で常識だと思われていることが、別の社会では全く通用しないということもある。だから、「世界はこうだ」という決定的な見方など存在しない——そう考えられる。ここにあるのは、「世界は見方次第でどのようにでも見えるため、世界についての事実が何かを決めることはできない」という相対主義である。こうした二つの考え方は、どちらも私たちが日常的によく耳にするものだ。両者は全く逆のことを主張しているので、本当ならどちらが正しいのかを選ばなければならない。ところが、たいていの人は、両者の矛盾を意識することなく、二つの考え方を無自覚に使い分けている。

では、学問の世界はどうだろうか？

実は、二〇世紀後半の人文・社会科学の理論に限って言うと、そこで大きな影響力を持ったのは、アットウ的<sup>(a)</sup>に相対主義の方だった。「言語論的転回 Linguistic Turn」と呼ばれる思想<sup>(b)</sup>②<sup>(2)</sup>チョウリュウのもと、相対主義と親和的な考え方が広がったのである。

例えば、二〇世紀フランスの現代思想は、スイスの比較言語学者フェルディナン・ド・ソシュールの理論を淵源<sup>(c)</sup>としながらも、広い意味での〈言語〉が思考を規定するという見方を推し進めた。未開社会の文化を言語学や数学のモデルによって説明したクロード・レヴィ・ストロースの人類学、人間の無意識を言語によって構造化されたものと見なすジャック・ラカンの精神分析、あらゆる文化現象を記号として読み解くロラン・バルトの記号学、それぞれの時代の言説を歴史的変化の側面から掘り起こすミシェル・フーコーの言説分析、そして哲学のテクストが意図せずして抱える自己矛盾を暴き出すジャック・デリダの脱構築。一つ一つがユニークな発想を含むが、いずれも私たちがものごとを自由に考えているのではなく、実は〈言語〉それ自体が不気味な自律性——あるいは他者性——を持つことを明らかにしている。

同じことは、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけてドイツ語圏・英語圏で生まれた分析哲学や、その影響のもとで発達した

英米系の科学哲学にも当てはまる。伝統的な哲学において、言語は特別な位置を占める対象ではなかった。問われるべきは個人の意識であり、意識を適切に反省することが目指されていたのである。ところが、分析哲学は、哲学の問題を言語の問題へと変換し、言語表現の分析を哲学の中心に据えた。その中で、私たちの認識——とりわけ科学的認識——が、深いところから言語表現に規定されているという見方が主流になる。例えば、観察と理論の不可分性を示したW・V・O・クワインの全体論や、科学史上の学説の交代を「パラダイム」と呼ばれる認識枠組の転換として描き出すトーマス・クーンのパラダイム論は、その代表格である。

これらの思想は、哲学・人類学・歴史学・社会学といった人文・社会科学の様々な領域へと浸透し、広い意味での〈言語〉こそが私たちの思考を規定しているのだという認識を強烈に印象づけてきた。それによって、人文・社会科学は〈言語〉という重要な視点を獲得することになった。

ところが、それは同時に、次のような深刻な懐疑を生み出した。——もし私たちの思考が、広い意味での〈言語〉によって規定されており、当の〈言語〉が時代や文化ごとに異なるものであるとするなら、私たちが「いま・ここ」で「正しい」と思っていることも、別の時間・空間では通用しない幻想にすぎないのではないか？ 私たちの思考はあくまでも「近代・西洋」という時間・空間の制約を受けているのではないか？

こうした疑いから、果たして「真理」「事実」「証拠」「客観性」といったものが本当にありうるのかという問題が、一種の難問<sup>アボリア</sup>として浮上してくる。もちろん、歴史を遡れば、思考の外部を認めるか否かをめぐる論争は古くからある。中世の普遍論争では、「普遍」（＝類や種）が存在すると考える実念論と、それを人間が作り出した単なる「名辞」（＝ラベル）にすぎないと見なす唯名論が論争を繰り広げたし、一九世紀には、精神より物質の方が根源的だとする唯物論と、物質的世界を精神の産物だと見なす観念論が鋭く対立した。だから、上記のような疑念は、唯名論や観念論の

けれども、二〇世紀の「言語論的転回」の場合には、こうした議論が、歴史資料の分析やフィールドワークといった経験的研究をめぐる方法論の広範な見直しにつながった点に特徴がある。先ほどの疑念を真面目に受け取るならば、自分自身の文化

的・歴史的制約を顧みないような素朴な方法論は、根本から見直さなければならぬ。こうして、「言語論的転回」以降、相対主義の考え方が無視できない影響力を獲得したのである。

ところが、二一世紀に入って、これとは全く逆<sup>④</sup>の考え方が広がりつつある。すなわち、データやソース（引用元）といった「エビデンス」を重視する風潮が、至るところに浸透しているように感じられるのだ。

この言葉が広がる<sup>③</sup>ケイキとなったのは、一九九一年にカナダの医師ゴードン・ガイアットが提唱した「根拠に基づく医療」すなわち「エビデンス・ベースト・メディシン Evidence-Based Medicine」である。それは、医師の個人的経験や理論的解釈ではなく、最新の<sup>①</sup>リンショウデータに基づく治療を目指す考え方であり、九〇年代を通じて医療の世界に浸透した。現在では「エビデンス・ベースト」という標語がさらに、教育や政策など医療の外にまで広がっている。

「エビデンス」と呼ばれるのは、主として「科学的証拠」だが、この言葉は日常生活にも浸透し、何かにつけてデータやソースを求める態度を生んでいる。それが、健全な実証主義を超えて、「エビデンシヤリズム」（＝証拠至上主義）とも呼ばべき強迫的な態度に至っているとの批判もある。

同じように、「<sup>②</sup>事実」や「<sup>②</sup>真実」といった言葉も、ますます重要性を増している。科学・政治・経済・芸能をめぐる情報が「事実」かどうかに関心が向けられ、「事実」と言えない情報は、「デマ」や「陰謀論」あるいは「フェイク・ニュース」といった言葉で直ちに切り捨てられるようになっていく。

「言語論的転回」がもたらした過激とも言える相対主義と、「エビデンス」を重要視する楽観的な実証主義。相対主義の観点からすれば、何が「エビデンス」であり、何がそうでないのかは、あくまで 12 だと言いたくなる。そうした留保なしに特定の「エビデンス」を信奉することは、自分と異なる意見を排除する言論空間を発生させてしまう可能性を孕む<sup>⑤</sup>からだ。実際、「デマ」に引っかけるのは、往々にして「エビデンス」を過剰に追い求めてしまう場合である。しかし、逆に、相対主義を過度に重く見てしまうと、今度は「デマ」を「デマ」として批判することもできなくなってしまう。それどころか、「デマ」とされる側の方が、相対主義のフレーズを積極的に取り入れてさえている。

こうした中、現代の人文・社会科学は、相対主義と実証主義の狭間で股裂きになっているように見える。一方では「真理など存在しない」という考え方が根強く残っているが、他方では「エビデンス」に基づかない言論を「ギジ科学<sup>e</sup>」や「デマ」として批判することにも必要になっており、態度が分裂しているのである。

（松村一志『エビデンスの社会学』による。ただし本文中の註を省略した）

問一 二重傍線部<sup>a</sup>～<sup>e</sup>の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各項の中からそれぞれ選び、その番号をマークせよ。

1	①	1	リットウの候	2	心理的なカットウ
	3	3	都会のザットウ	4	血を見てソットウする
2	②	1	リュウゲンに惑わされる	2	リュウトウ蛇尾
	3	3	リュウネンの危機	4	細かいリュウシ
3	③	1	ケイセツの功	2	感染ケイロ
	3	3	論文のケイサイ	4	ケイヤク解除
4	④	1	ジンリンにもとる	2	リンセツ地域
	3	3	頂点にクンリンする	4	本をリンドクする
5	⑤	1	ジカイの念	2	筆跡がコクジする
	3	3	カイジ請求	4	業務にジュウジする

問二 傍線部①の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6

- 1 しかるべき科学的な手続きを踏めば、世界に関する事実が確定的に明らかになるという考え方
- 2 科学的な証拠に反したとしても、個人的な信念が貫かれていさえすればよいという考え方
- 3 観察や実験により明らかになった事実をもとに、主観的な解釈を重ねるべきだという考え方
- 4 蓄積された量のために硬直化した知識を取り除けば、世界の正しい理解が得られるという考え方

問三 空欄

7

に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

- 1 「真実」と「誤り」の間に越えられない壁がある
- 2 フランスとスペインでは「知能」に差がある
- 3 地域ごとに「知識」が変わってしまう
- 4 どちらが「正解」かを選ばねばならない

問四 傍線部②のようという理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

8

- 1 言語表現が私たちの認識を深いところで決定しているという現実は、他者への寛容性や信頼に起因するから
- 2 人間の思考を規定する広義の言語もまた時代や社会によって異なり、私たちの正しさもその制約を受けるから
- 3 言語論的転回と呼ばれる動きは二〇世紀より前の人文・社会科学の理論を大きく相対化する力を持ったから
- 4 文化現象や無意識の基底にある言語が無視できないほどの自律性を持ち、人類と相対するようになったから

問五 空欄

9

に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

9

- 1 仕返し
- 2 焼き直し
- 3 先取り
- 4 巻き戻し

問六 傍線部③の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

10

- 1 歴史資料の分析やフィールドワークなどのあり方について根本から真面目に疑って見直してみようという方法論
- 2 言語論的転回以降に相対主義の考え方が獲得した影響力の大きさを無視することで個人的経験を重視する方法論
- 3 自分たちの正しいと思うことが特定の時間や空間に規定されているのではないかという懷疑を経えない方法論
- 4 自分たち自身の文化や時代があくまでも幻想にすぎないのではないかという疑念を差しはさむことのない方法論

問七 傍線部④のようという理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

11

- 1 証拠というものの徹底した疑いを持つ考え方とは打って変わって、証拠を過剰に求める考え方だから
- 2 そもそも一方はヴィトゲンシュタインの発想、他方はパスカルの発想にそれぞれ導かれた考え方だから
- 3 二〇世紀後半には人文・社会科学にあった理論的な影響力が、二一世紀に入って医療分野へ移ったから
- 4 個人的経験や解釈を重視する従来の考え方とはちがって、データやソースを重視するようになったから

問八 空欄 12 に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

12

- 1 絶対的
- 2 文脈依存的
- 3 主観的
- 4 状況分析的

問九 傍線部⑤の理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

13

- 1 相対主義は世界についての事実が何かということをひとつには決められない考え方だから
- 2 相対主義は強迫的に根拠を求めるエビデンシヤリズムの態度すらも許容する考え方だから
- 3 相対主義は言語が私たちの思考を規定していると見る言語論的転回をも相対化する考え方だから
- 4 相対主義は自分と異なる意見を排除する言論空間を発生させてしまう可能性をもつ考え方だから



〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。解答番号は〔二〕の 1 から 9 までとする。

まづ侍は常に義理を第一といたし、一言にても相違あればとがめ、間のぬからぬ所が侍の道でござる。互ひに一言をとがめあふからは、堪忍のならぬにより、常にかたき所の心を綿やふくさに包み、角らしき所に人のあたらぬやうに、前方より用心致し言葉とがめ致してから、打ちはたし申さねばならぬ。ここをとくと合点さつしやつたがよい。①主君の先懸け、敵を打ち取り申すやうな殺生もござれども、是は侍の所作にて、侍の身の上にては殺生とは申さぬ。ただ我とたくみ出して打ちはたし申すが、是が殺生でござる。仏心を修羅道②にかへます。

ア身どもは江戸にも庵がござる。麻布と申す所にて、江戸の傍で③ござる。ある時それがしひさしくつかひました者が、少し心ざしもござるゆへ、出家の所作をも常に見まするによつて、心ざしも自ら起こり申すが、この者同宿どもがある晩に使ひに遣してござるが、その道は江戸はづれゆへ家なき所にて、切々辻切りいたし、暮れかかりては一人参ること、心もとないと申せば、④いやつい帰り申すと申すゆへ、その通りにいたしたれば、つひに参り、戻りに日暮に、いつもの所に辻切居合、彼小者とすれ合ひ、汝が袖を身に当てをつたと申して、刀を抜きましたれば、小者が申すには、我等袖は当り申さずと申し、何かなしにその辻切を三拝いたしてござれば、⑥不思議の者なり、ゆるす通れと申してその難をのがれました。さる商人この体を見まして、かたはらなる茶屋へ逃げこみ、その様子そつとのぞき、今切るか、はや切るかと存ずる内に、小者のかの商人が前に来りました。さてさて其方はあやうひ所をのがれたり。さて今の礼拝は、いかが思はれ致されたぞと申せば、我等方に居る者常に三拝を致す。今も何心なく切らば切るまでよと思ひ、三拝を思はずしらず致したれば、汝は不思議の者なりと申して、ゆるす通れといふて、通しましたと申して、難義をのがれ戻りましたが、是等はのがれまじき所をのがれました。⑧とく信心の志ござるゆへであつたものでござらふと申したことござる。然れば無道なる辻切さへ、心andraぎましたは、⑨仏法ほど疑はまい物はじやあらぬ。



問一 傍線部①の意味として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1
- 1 主君の前を走りぬけて
  - 2 盾となって主君をかばって
  - 3 戦場で先陣をきって
  - 4 戦場で指揮をとって

問二 傍線部②に近い意味のものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 2
- 1 仏道
  - 2 無道
  - 3 正道
  - 4 侍の道

問三 波線部ア～エのうち、傍線部③の主語にあたるものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 3
- 1 ア 身ども
  - 2 イ それがしひさしくつかひました者
  - 3 ウ 同宿ども
  - 4 エ 辻切

問四 波線部ア～エのうち、傍線部④の主語にあたるものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 4
- 1 ア 身ども
  - 2 イ それがしひさしくつかひました者
  - 3 ウ 同宿ども
  - 4 エ 辻切

問五 傍線部⑤の意味として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 5
- 1 何がかなく
  - 2 何も言うことがなく
  - 3 なんとなく
  - 4 杳然として

問六 傍線部⑥の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6

- 1 おまえの不思議な力は、辻切どもさえも怯<sup>ひ</sup>ませてしまうほどだ
- 2 おまえが信じているのは不思議な教えだ
- 3 おまえはそんな不思議な奇跡を起こせるのか
- 4 おまえは不思議なふるまいをするやつだ

問七 傍線部⑦の意味として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

- 1 いざとなれば心を無にして、相手を切つてすてるまでするだと思つて
- 2 自分がどうなろうと、全てを仏への信仰に委ねようと思つて
- 3 何という考えもなく、自分を切りたければ切るがよいと思つて
- 4 もし切りつけてくるならば、こちらも反撃してやろうと思つて

問八 傍線部⑧の意味として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

8

- 1 早くから信仰心をいだいていたため
- 2 篤い信仰心が強く根づいていたため
- 3 人を説き伏せられるだけの信仰心をもっていたため
- 4 できるだけ短い時間で信仰心を育成していたため

問九 傍線部⑨の意味として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 世に仏法ほど疑いからほど遠いものはない
- 2 世に仏法ほど疑われるべきでないものはない
- 3 仏法ほど世で疑われていないものはない
- 4 仏法ほど人の世に疑う心を育てるものはない

人間は「過去・現在・未来」に同時に存在することはできない。

しかし冬を目前にしたヨーロッパのある民間の祭日では、その一年の始まりの前夜に、「生まれること、生きること、死ぬこと、再生すること」のすべてを、一夜にして目撃できるという。それは、厳しい北ヨーロッパの風土に生きる人々の実感に根ざしていた。「万霊節」と呼ばれるケルトの祭「サウイン」である。

今日イヴェント化されている「ハロウィン」の起源は、このケルト伝統の「サウイン」にある。

十九世紀、アイルランドやスコットランドからの移民がアメリカに伝え、あらためて広まった「ハロウィン」は、実は、ヨーロッパの基層文化を築いたケルトの人々の供養の季節祭に遡るものである。

③ ケルトの暦の「新年」は、今日の太陰太陽暦の十一月一日に当たる、厳しい「冬の始まり」の第一日目とされた。前夜の大晦日、十月三十一日の日没から始まる「サウイン」の夜に、それまでの一年の「旧い時」と、来るべき「新しい時」とが、うねりを起こし、混ざり合う。ふだんは「死と生」を隔てている壁が破られ、「あの世とこの世」の間の扉が開かれ、「祖先」と、親しい「死者たち」が、この世に戻ってくると信じられた。

すなわち「サウイン」は、祖先の霊や親しかった死者を、家に招き入れて、もてなし、静かに供養する、冬の始まりの夜だった。

この時季、太陽のエネルギーは極端に弱まり、「光の半年」が終わって、死の季節である「闇の半年」へと反転すると、人々は考えた。大自然の生命力が「光から闇へ転じてしまう節目」がこの時であり、死者はこの世に戻ってくるという信仰が、「サウイン」の暦が生まれる大元にあった。

中世ローマ・カトリック教会が、ケルトの正月に当たる十一月一日を「諸聖人の日」と定めてから、その前夜、教会では祈祷がおこなわれ、また、公式ではないが一般では「ハロウィン」として祝われるようになった。歴史上、異教ケルトの「サ

ウイン」と、キリスト教の「ハロウイン」という二つの祭暦がその結果、重なることになる。いずれにしても、今日、「ハロウイン」はそのルーツにあった「サウイン」の精神を引き継いでいる。

すなわち「サウイン／ハロウイン」は、元より「生と死の対立」を煽る夜などではなく、祖先や、逝った親しい仲間と、魂を交流させて、闇の季節の安寧と、闇に沈んだ者たちが「闇から光をみいだす」ことを願う夜であった。

厳しい冬の飢餓にさらされる季節に、祖先の霊や親しい死者たちが蘇り、それを供養するという人々の思いは消えずに残ったのである。

最も厳しい「闇の季節」の入り口に立つこの夜、「死者」を供養し、家に招く。もしも人間たちが、祖先や、無念のなかに去っていった者たち、できごとを、忘れてしまったなら、祖先や死者たちの霊は、警告するために、あえて悪霊の姿で現れることになるだろう。

ふだんは「この世」か「あの世」かのどちらかに縛られている存在同士が、両方を行き交う時空が現れる夜のおかげで、サウインは私たち人間が、「死者を慰める」ばかりではなく、生きる者たちこそが、「死者たちから生命力を贈与される」、恵みの夜ともなる。

④「サウイン」の恵みとは、希代のアイルランド人小説家J・ジョイスが『フィネガンズ・ウェイク』(一九三九年)で描いたように、もはや過去の人であると皆が諦め集った通夜の只中に、死んだフィネガンが目覚め、生き返ってくるような奇跡である。またそれは現代アイルランドのトム・ムーア監督の傑作アニメ『ブレンダンとケルズの秘密』のように、少年修道士が出口なき悲しみの森を彷徨い、もう駄目かと思われたその瞬間に、緑葉を付けた檜の木の下に出会うような救いである。

なぜ、黒々とした「サウイン」の夜に、生者にこのような「恵み」がもたらされるのかといえば、この特別の夜に蘇る死者とは、過去の存在などではないからである。死者は生者が同情する弱い存在であるところか、言葉も行動力もち、時空を超えて何か大切なものをもたらす導き手である。フィネガンのように、「死んだ男」は、ケルトの想像力においては「過去に留まる幽霊」ではありえず、それどころか過去・現在・未来を行き来して、この世の者たちに何かをもたらすスピリットなので

ある。

「生と死」や「あの世とこの世」、「光と闇」は 6 なのではなく、常緑の「循環」する生命のサーキュレーションとしてあることを、「サウイン」というケルトの伝統は、教えてくれる。

それゆえ私は今までイメージされてきた「黒いハロウィン」ではなく、生命が再生する季節祭として「緑のハロウィン」と密かに名づけてきた。動物も植物も鉱物も人間も「生きとし生けるもの」は、たとえ枯れても死んでも、大自然の生命循環の円舞に乗って「再生」し、どこかで芽を出し、再び緑の葉を茂らせる。その出発点に「サウイン／ハロウィン」があるのだと、古代中世の人々は信じていただろうからだ。

そしてここに「サウイン」の始原に繋がる、とても重要なことがある。

「サウイン」は「ケルトの暦（ケルティック・カレンダー）」における「四つの季節祭」の第一番目の暦日であるということである。

農耕牧畜を営むケルトの人々は、一年のサイクルをはかり、順に巡ってくる「冬・春・夏・秋」という「四つの季節祭」の暦を生きていた。「冬のついたち」サウイン」「春のついたち」インボルク」「夏のついたち」ベルティネ」そして「秋のついたち」ルーナサ／ラマス」という「四つの季節祭」を、大自然の「生命循環の周期」の節目と考えた。人々はそれに添って生き、「生まれて死ぬ」という直線の生命ストーリーではなく、大自然に学び、「死から再生する生」という「生命循環」のヴィジョンをケルトの知としてつくりあげてきた。

死者の季節である冬「闇の始まりの「サウイン」を、ケルトの「四つの季節祭」のスタートに定めた意味はそこにある。古代中世を生き抜いた人々は、「死から立ち上る生が、最も強く豊かな生である」ことを身をもって知っていた。

「サウイン／ハロウィン」の夜のように、私たちも、「闇」から始めることで、再び生まれ直すことができるかもしれない。現代の生命論への深いヒントもそこに隠されている。

問一 傍線部①の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

1

1 「サウイン」は「万霊節」とも呼ばれ、近親者を家に招じ入れて盛大にもてなす祭である

2 厳冬の始まる初日である「サウイン」は「ハロウイン」とは別の起源があると考えられる

3 「サウイン」には「生と死」の隔たりが破られ、「死者」が戻ってくると信じられている

4 「過去・現在・未来」を一度に目にする「サウイン」の伝統はアメリカにまで伝えられた

問二 傍線部②の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

2

1 アイルランドやスコットランドからアメリカへの移住者は、ケルト再興を図るために「ハロウイン」を祝った

2 中世ヨーロッパにおいて「ハロウイン」は、宗教行事としての地位を剥奪されながらも細々と執り行われた

3 ケルトの元日がキリスト教の祭日としても取り入れられ、「サウイン」の始まる晩は「ハロウイン」と呼ばれた

4 現代における「ハロウイン」は、本来の精神を見失い、商業主義的なイヴェントに成り果ててしまっている

問三 傍線部③の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

3

1 ケルト暦の大晦日の晩には「旧い時」が「新しい時」を呑み込んで両者が混ざり合う

2 太陽光はこのころ非常に弱くなり、「光の半年」から「闇の半年」への反転が起きる

3 ローマ・カトリック教会はケルト人たちの不満を抑えるため、この日を祭日と定めた

4 中世ローマ・カトリック教会ではこの日に祈祷が行われ、怨霊となった者を撃退した



問四 傍線部④の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

4

- 1 「サウイン」の恵みとは、生者により慰められた死者が、その恩返しとして生者に生命力を付与することである
- 2 『フィネガンズ・ウェイク』における蘇りは死者が現世に時空を超えて富をもたらす存在であることを表現する
- 3 「サウイン」の夜には生者と死者がそれぞれを縛るくびきから離れて自由になることにより恵みがもたらされる
- 4 悲しみのなかで檜の木の枝に見出される宿り木もまた、蘇った祖先たちからの感謝のしるしであると言える

問五 傍線部⑤の語句の言い換えとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

5

- 1 天才的な
- 2 新奇なる
- 3 天衣無縫の
- 4 不世出の

問六 空欄 6 に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

6

- 1 代替可能
- 2 二項対立
- 3 表裏一体
- 4 二者択一

問七 傍線部⑥の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

- 1 「緑のハロウィン」は、死者が悪霊となつて生者を脅かすような従来のハロウィン観を否定する概念である
- 2 生命の再生を願うサウインに起源を持つハロウィンは、「黒」よりむしろ「緑」で表象されるべきである
- 3 サウインはケルト暦の四つの季節祭の一番目に位置するため闇の要素が濃く、従つて「黒」で表されてきた
- 4 「過去・現在・未来」のすべてを同時に表現できる色は緑だけであり、よつて最もハロウィンにふさわしい

問八 本文の内容と合致するものとして、あてはまらないものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 ケルト人にとっての死者は決して無力ではなく、言葉や行動によって生者に働きかける存在である
- 2 森羅万象は枯死しても再生し生命循環に乗ることができるので、ケルトの戦士は死を恐れなかった
- 3 ケルトは農耕牧畜社会であり、それぞれの季節の節目に祭を行い、大自然との繋がりを深めていた
- 4 ケルト暦とその祭礼からは、死者たちの闇こそが生に強度を与えていると結論づけることができる

(以下余白)